

「浪子」燕青と高俅

——〈水滸傳〉人物論の一視點として——

川 浩 二

序

燕青と高俅 基礎資料の確認

「浪子」と「浮浪子弟」

浪子の世界 徽宗、李師師、李邦彦を介して

補

おわりに

序

小説『水滸傳』中に、しばしば人物、もしくは人物集團相互の類似關係が見られることはつとに指摘される^①ところであり、人物形成についての研究、また小説全體の成立過程についての研究において、利用されるところが大き^②かった。

大きなところでは、同じ強人から始まった方臘集團と梁山泊集團の對比があり、小さいところでは魯智深と彼が打ち倒

す「鎮關西」の鄭屠の關係がある。また、林冲の容貌が『三國演義』の張飛に例えられていることについてなど、『水滸傳』と他の小説、資料とを對比することによる研究も行われてきた。今回本稿で行おうと試みるのは、『水滸傳』中隨一の惡役として扱われる高俅と、梁山の一英雄である浪子燕青の比較である。

通行、『水滸傳』の讀まれ方としては、義に厚い好漢たちが集う梁山泊の集團と、貪官汚吏の集まりである朝廷の役人たちは全く對立し、その對照關係が『水滸傳』という小説の構造を成り立たせている、と考えられることが多かつたかと思われる。

しかし、そのように一見まったく逆の立場に身を置いているかに見える燕青と高俅という二人物の關係を考察すること

によつて、必ずしもその文脈のみが正しいわけではないことが理解されるであらう。

なお本稿における人物という語は、小説、史書、雑記のいづれについて書いた部分においても、あくまで實在の人間について言つたものではなく、小説における「キャラクター」に近い意味に用いている。テクストの中から読み取れる限りの部分しか存在していないと考える謂である³。

また、本稿では『水滸傳』が章回小説としての體裁を整えるに至るまでの過程と、その到達點としての『水滸傳』本文を材料とする。そのため本文のテクストには容與堂本（百回本）を使用し、百二十回、七十回の各版本、またいわゆる文簡本系統の諸本については觸れないこととする。文中で『水滸傳』本文について記述している場合には全て容與堂本に基づいている。

燕青と高俅 基礎資料の確認

本稿は、燕青と高俅を小説『水滸傳』中における人物として比較し、その検討作業によつて二人が「浪子」という同種の人物類型に當たることを證明することを目的とする。

その目的に向けた最初の作業は、二人が小説『水滸傳』に見られる姿になるまでにたどつてきた道のりを概観することである。

燕青の名前は南宋代の『癸辛雜識』が現在見られる限りの初期の資料であるが、實在の人物として事跡をたどることのできる高俅については北宋當時の記録が存在する。

それらの記録から始め、元、明代を経て完成した本文の記述に至るまでを、それぞれについて整理しておこう。

燕青の人物

梁山泊の好漢の一人である燕青については、一般的に用いられる資料がいくつか存在する。『癸辛雜識』と『大宋宣和遺事』⁵は、現在目録し得るものの中で最も直接的に『水滸傳』の成立に關わりと考えられている資料であるし、また、元曲中における水滸を題材にした劇目、いわゆる「水滸戲」は、そのエピソードが成書と重なるものが少ないことを差し引いても、好漢個人の人物をよく見られるだけに、重要な資料になるといえよう。

『癸辛雜識』にある『宋江三十六人贊』での燕青は、他の好漢と同じく、十六字の贊が與えられている。

浪子燕青 平康巷陌 豈知汝名 大行春色 有一丈青
 ここから知れるのは、おそらく「浪子」という言葉が、平康巷陌、つまり花街と關わりがあるだろう、ということであり、そしてまたこのときの燕青がそのような場所と關わりなく強人、山賊稼業をしていたのではないか、ということである。『大宋宣和遺事』では、燕青はほぼ名前だけの登場であり、以下の文以外には、全員の名簿に入っているだけである。

・・・姓名名蓋、人號喚他做鐵天王、帶領得吳加亮、劉唐、秦明、阮進、阮通、阮小七、燕青等。

このいわゆる「智取生辰綱」故事の登場人物としての燕青が、どのような役割を果していたのか、この短い記述からうかがうべくもないが、少なくとも、晁蓋らと同じ立場にあつて、強奪に加わつたのであれば、とてもこの成書に見られる北京での都會生活などは考えられまい。事實、この時點では盧俊義（李進義）と燕青は全く關わりを持っていないし、その二人とも北京とは縁がない。

また元曲の『同樂院燕青博魚』^⑤では、本文で見られるような藝能の能力をもたない、と自ら歌う燕青の姿を見ることが出来る。

往常時我習武藝、學兵法、到如今半壽也不納。則我這

「浪子」燕青と高俅（川）

擎云手、怕不待尋覓那等瞎生涯。我能舞劍、不能道是敲簫板、會輪槍須不會撥琵琶著、甚度年華。

武藝はできるが、敲板や琵琶はできないので、目の見えないう今一體どうやって身を立てようか、という内容だが、このような人物も、「浪子」と呼ばれたことが讀み取れる。また、この劇中では悪役の楊衙内という人物にも「浪子」という言葉が使われている。

花花太歲爲第一、浪子喪門世無對。

自らを言うこの浪子、というのならば者、また放蕩息子、というような意味であると考えられる。

同じく元曲『黑旋風仗義疎財』^⑥の中では、黑旋風李逵が「山兒」と呼ばれるのに對して、燕青の「浪子」というあだ名が使われ、この二人のキャラクターが『水滸傳』本文に近い對比を見せていると考えられよう。また、成書の成立と前後する時期には、盧俊義との關係が語られる劇目も登場する。

本文での燕青の經歷、つまり幼いころに父母を亡くし、北京大名府の大商人である盧俊義の家に引き取られ、可愛がられて育つた、という設定は、資料を整理してみた限りでは、成書成立の段階もしくはそれに近い時期に決定されたものであると考えられる。

燕青がそうした都會育ちの洗練された部分を持っているからこそ、妓女の李師師の家に入りこみ、皇帝との仲を取り持つてもらうことができたわけであるから、招安の取りつけという作業を小説中で改めて具體化せざるを得なくなつた段階でそうした人物として完成した、と見ることは十分可能であらう。

高俅の人物

歴史上に確かに存在した高俅という一個人は、史書から見る限り成書中に書かれるような存在感のある奸臣ではなかつたようである。『宋史』^⑧、南宋代の雜記である『揮塵錄』^⑨、ついで再び『宣和遺事』の記述を取り出すこととしよう。

『宋史』の中での高俅は、獨立した傳を持たない。徽宗皇帝の本紀などに、端々に名前が見える程度である。そこでは、『水滸傳』中にも登場する奸臣、童貫と並列に書かれている。ただ、太尉という官職は、のちに名高い岳飛や韓世忠もつく武官であり、そのような職に後に見える『水滸傳』における高俅のような經歷の持ち主ははなはだ似つかわしくない、という事は言えよう。ちなみに史書の記述によれば彼は童貫らが處刑された後も生き残り、死後は官位を奪われたものの、それほど悲惨な最期ではなかつた、とある。

『揮塵錄』(抄)

高俅はもと蘇東坡のもとにいた。その後曾文肅のもとを経て、王晉卿に仕えた。殿上で王晉卿は髪を整えるへらを端玉に貸したところ、それを氣に入られたので、高俅に命じてこれを贈らせた。その折たまさか端玉が蹴鞠をしているところに出會い、そこで妙技を見せて氣に入られ、そのまま留まることになり、大變可愛がられた。そうして出世を欲しいままにし、一族も榮華を誇つたが、蘇氏の恩を忘れることなく、その一門を良く世話した。靖康の初め、天子に隨行していた途中、病で都に歸つたため、當時そば仕えていた童貫や梁師成らは處刑されることになつたが、高俅は寢床で死ぬことができた。

この後に載せた本文での出世物語は、ほとんどこの段階で完成していたことが見て取れる。また、彼に對しての評價が、全體に必ずしもマイナスではないことも考えておきたい。出世するのに武功や政務の能力をもつてしたわけではなく、奸臣の一員に數えられてはいるにせよ。

『大宋宣和遺事』でも、『宋史』、『揮塵錄』と同じく高俅は童貫とともに行動している。ただし特に一人目立つた行動はなく、人物像を知る手がかりが少ない。ごく一般的な奸臣、と

というのが役どころである。

本文第二回（抄）

高俵はもと東京開封の閑漢で、金持ちの息子に金を使わせて道楽三昧をしていたが、その富豪に訴えられ、棒打の刑を受けて東京を追放された。追放先の臨淮州ではばくち打ちの世話になっていたが、大赦によって都に戻る事ができた。紹介された薬屋のもとから蘇東坡の家に戻されたが、蘇東坡は彼を氣に入らず、一晚を過ごさせたのみで、王晉卿の方にたらいまわしにする。そこからは『揮塵錄』と同じく、ひよんなことから端王に氣に入られ、出世していく。事跡は全體に複雑になり、東京を追放される下りやばくち打ちに世話になっていることが加わって、より經歷は卑しいものになっている。蘇東坡との關係は、彼の名聲を傷つけまいとしてか、このような幫間じみた人物を氣に入らなかつた、ということになっている。

注目すべきなのは、高俵が武官であつたからこそ、近衛軍の教頭、王進を罪に問う事ができ、逃げる王進が史家村で史進と出会い、一人目の好漢が生まれるという展開である。その流れは先の燕青と同じく、小説全體の構成を考えた上で生まれたものと考えるのが妥當であろう。さらにはそのために

高俵という人物が數ある奸臣の中から選び出されたという豫測も持ちうるのである。

資料整理の最後に、以上で擧げてきたそれぞれについての材料のうち、もつとも二人の特徴が直接的に表わされている、登場の場面の記述を取出し、並べておこう。それは一方では『水滸傳』本文における二人の人物の到達點を見ることになり、また他方、本論としての比較作業の端緒としても最適であろう。本文第二回、高俵の出世物語とも呼べる部分では、高俵という人物をこのように語っている。

且說東京開封府卞梁宣武軍，一箇浮浪破落戶子弟，姓高，排行第二，自小不成家業，只好刺鎗使棒，最是踢得好脚氣毬，京師人口順，不叫高二，卻都叫他做高毬……這人吹彈歌舞，刺鎗使棒，相撲頑耍，頗能詩書詞賦，若論仁義禮知，信行忠良，卻是不會……

また、第六十一回、浪子燕青登場の場面では、燕青はこのように記述されている。

這人北京土居人，自小父母雙亡，盧員外家中養的他大……不則一身好花繡，那人更兼吹的，彈的，唱的，舞的，折白道字，頂真續麻，無有不能，無有不會。亦是說

的諸路郷談、省的諸行百藝的市語……北京城裏人口順、都叫他做浪子燕青。

一方は東京開封府の生まれ、一方は北京大名府の生まれ。家業を顧みない「浮浪子弟」と、幼くして父母をなくした「浪子」。共通しているのはさまざまな藝事が得意である、という部分である。

そして、二人に共通する藝事というのが、都市的な藝能という色合いが強いことは念頭においておきたい。お座敷藝的な笛、歌、踊りといったもの、また大道藝的な相撲、槍棒をはじめとする武藝は、都會的な洗練を持っていながら、正統の文人がこなす藝能、その藝術性を誇るものとは、性格を異にするということである。

「浪子」と「浮浪子弟」

資料を挙げてきた燕青と高俅の二人物を比較していくことにするその際、中心になる要素がこの二人をそれぞれ形容する「浪子」また「浮浪子弟」という言葉である。二つの單語を單純に文字の上から見て、つながりを想定することもできず、そうするには、「浪子」という言葉はやや廣い意味を持ちすぎているようである。燕青の人物形成過程において見た

諸資料からも分かるように、「浪子」という言葉と、高俅のよなもともと都會育ちの人間は本來必ずしも結びつかない。

ほぼ同時代の歴史資料である『建炎以來繫年要錄』¹⁰卷三十一には、冠浪子という名の強人が登場しており、「浪子」という言葉はそうした、單純なならず者、という意味も十分含んでいると見ることが出来るからである。

つまり、この二人の類似性を考えるには、「浪子」という言葉の指すものが、少なくとも水滸傳中において「浮浪子弟」という言葉と重なる形で限定されている必要があるわけである。

そうした視點で、「浪子燕青」という名前から離れる形で資料を探して見ると、「浮浪子弟」という言葉が、燕青本人にもついて回ってくるものであることがわかる。先ほども見た本文第六十一回には、燕青の外見についてこのような記述がある。

六尺以上身材，二十四五年紀，三牙掩口細髯，十分腰細膀闊，帶一頂木瓜心攢頂頭巾，穿一綾銀絲紗團綾白衫，繫一條蜘蛛斑紅線壓腰，著一雙土黃皮油膀胛鞋，腦後一封挨獸金環，護項一枚香羅手帕，腰間斜插名人扇，畔常簪四季花。

それに對して、『三遂平妖傳』¹¹の第五回には登場人物の「浮浪子弟」に對してこのような詞がうたわれているのである。

六尺以下身材，二十三年紀，三牙掩口細髻，七分腰細膀闊，戴一頂木瓜心攢頭巾，穿一領銀絲似白紗衫子，繫一條蜘蛛斑紅線壓腰，著一雙土黃色多耳皮鞋，背著行李挑著柄雨傘。

この詞が直接水滸傳中に流入したのかどうかはともかく、形式といい内容といい、この二つの資料が少なくとも同じ來源をもつであろうことは疑いない。

また、『醒世恒言』第十七回『張孝基陳留認舅』の中では、過遷という名の放蕩息子について、このような記述が見える。

喜的是喫酒，愛的是賭錢，蹴鞠打彈，賣弄風流，放雞擊鷹，爭誇豪俠，耍拳走馬，骨頭輕使棒輪鎗心竅療……
有一班浮浪子弟誘引……

この部分はほとんどそのまま高俵の記述といつても通るようであるが、この「浮浪子弟」が、身を持ち崩し、放浪の末やがて歸つた故郷で、妹婿の張孝基という男に、身分を隠すために、と呼ばれる呼び名が過小乙、というのである。

你是舊家子弟，我不好喚你名字，如今改教做過小乙……
そこではこのように説明されている。

そして、言うまでもないことだが、小乙、は燕青の呼び名であり、燕青は本文中では、むしろ浪子、というあだ名より

「浪子」燕青と高俵（川）

も、こちらを強調されている。自稱の「小乙」に加え、盧俊義は「燕青小乙」、「燕小乙」と呼んでいるし、梁山泊の連中からは「小乙哥」と呼ばれている。このように本文に頻出する語である「小乙」が、「浮浪子弟」と關連付けられていることも、偶然ではあるまい。

加えて、本文第五十二回に、燕青得意の武器である川弩が登場していることを指摘しておこう。權門の貴公子、殷天錫の連れている鳥追の一團の中である。

將引閑漢三十人，手執彈弓，川弩，吹筒，氣毬，拈竿，樂器……

これは川弩という武器の使い方方の参考になるとともに、それがどのような世界とつながっていたのかを表わすものである。

以上の資料によつて、高俵の形容として使われる「浮浪子弟」という言葉が、燕青とすっかりと結びついているということは理解されたであろう。それは、廣い意味をもつ「浪子」という言葉を、少なくとも小説『水滸傳』における燕青の人物を考える上では、「浮浪子弟」の意味で限定して考えることが可能である、ということを意味している。

今までに登場した資料を、時代を追つて整理してみよう。

『建炎以來…』では、ならず者、という意味を含んでいると考えられ、『癸辛雜識』では、花街との關係をうかがわせつつも、このテクストの中ではやはりならず者のあだ名であろう。元曲の中に見られるような「浪子」は、ならず者に加えて放蕩息子、という意味を含み、そこにある意味と『平妖傳』の「浮浪子弟」の、やや粹なところを感じさせる姿はつながりを認めることもできよう。また、『醒世恒言』を見ると、各種の武藝と藝能が、「浮浪子弟」の特性として定着している様を見取れる。そして、『水滸傳』ではまさに、技藝としての藝能と武技を身につけ、都會的な洗練をもった「浪子」の登場が見られるわけである。

「浪子」という言葉は、單純に意味を轉化させてきたのではなく、一般的な意味から特殊な用例が小説の中で際立ったものとして確立され、ある一つの人物の類型と呼べるだけのものになり、それが『水滸傳』にも現われていると考えられる。

また、高俅との比較、ということから考えると、燕青は見てきたように「浮浪子弟」の際立った特徴を持つてはいるが、ある一點の要素によって差別化されている。それが好漢としての「義氣」であり、主人盧俊義に對する忠義である。それに対してごく一般的な「浪子」つまり、「浮浪子弟」の精神構

造を高俅は持つており、忠孝にうといとされている。言いかえれば、身分として「ならず者」であるはずの燕青が、「浮浪子弟」としての精神性を持たず、身分として「高官」である高俅が典型的な「浮浪子弟」の精神性の所有者である、という逆轉が起こつていると考えられるのである。

浪子の世界 徽宗、李師師、 李邦彦を介して

これまで、燕青と高俅を、主に二人に直接關わる資料とともに比較してきたわけだが、ここで、さらに何人かの人物をこの關係の中に加え、より多層的な比較を試みたい。

さしあたって、本文の中から取り出せるのは、小説の舞臺當時の皇帝、徽宗である。

そもそもこの徽宗皇帝に氣に入られて高俅は出世したわけだが、氣に入られるにもわけがあつた。この徽宗皇帝、『水滸傳』第二回では未だ端王と呼ばれていたのだが¹³は、本人にしてからが「浮浪子弟」だつたのである。

這浮浪子弟門風、幫間之事、無一般不曉、無一般不會、無一般不愛。更兼琴棋書畫、儒釋道教、無所不通、踢毬打彈、品竹調絲、吹彈歌舞、自不必說。

第二回でのこの記述は、物語展開上高俵の登場のすぐあとに描かれ、この主従の類似性を感じさせずに置かない。

また、徽宗皇帝と妓女李師師の關係はつとに有名であるが、その二人の關係にかかわりを持ち、さらに「浪子」と名のつく人物が歴史上に存在する。それが「浪子宰相」と呼ばれた李邦彦である。『宋史』李邦彦傳にはこのようにある。

邦彦俊爽，美風姿，未文敏而工。然長閭閻，習猥鄙事，應對便捷，善謳諠，能蹴鞠，每綴街市俚語爲詞曲，人爭傳之，自號李浪子。……都人目爲浪子宰相。

事實風流を好んだ皇帝のことであるから、側近にそうした人物を多く置くこともあるかもしれないが、この李邦彦と、高俵の間に類似の關係を読み取ることに決して無理はあるまい。高俵は早くから蹴鞠が得意だったというエピソードをとられているし、同時代の人物として徽宗皇帝のそばに仕えた、という歴史上の關係は大きい。

そしてまた、李邦彦は、燕青とも關連を持ちうる。『貴耳集』、『大宋宣和遺事』そして本文の第八十二回のエピソードを取りだし、それについて考えることにしよう。

『貴耳集』（抄）

徽宗が李師師の家にやってきたとき、たまさか周邦彦は

「浪子」燕青と高俵（川）

先に來ており、しかたなく寢臺の下に隠れる。周邦彦は徽宗の話から「少年遊」という詞を作ったが、それを李師師が歌ったため、徽宗は話を聞かれたことに気づき、怒ってこれを罰しようとする。蔡京からの誣告もあり、周邦彦は追放されるが、李師師からとりなされ、徽宗もその才能を惜しんで呼び戻した。李師師の家にはこのとき二人の邦彦が入り込んでおり、一人は周邦彦、一人は李邦彦であった。徽宗が李師師のもとに行くようになったのも、李邦彦のためであるという。

『大宋宣和遺事』（抄）

徽宗が高俵らに連れられてお忍びで李師師のところに行くようになるようになったところ、李師師には昔から通っている賈奕という男がいた。その男は皇帝が入り込むようになったことを聞き、絶望して「南郷子」という詞をおいて出て行こうとする。そこに高俵がやってくるが、とっさに李師師の兄だとその場はごまかす。徽宗は詞を目に止めつつも、そこに書かれた内容を黙って許した。一方賈奕は李師師が忘れられず、友人にそのかされて皇帝が市井の花街に入り込んでいることを密告し、それは諫官の上表することとなる。徽宗は怒って賈奕を處断しようとするが、結局思い

とどまる。

本文第八十二回（抄）

李師師の家に入りこんだ燕青は、徽宗に弟と紹介され、目の前で簫を吹いてみせる。さらに、皇帝の前で卑俗な詞を歌う許しを乞うたところ、徽宗はかえってそうした市井の曲を聞くためにこうして妓館に来ているのだからとすめる。燕青が「漁家傲」を歌うと、徽宗はさらに一曲を求めた。そこで燕青は梁山泊の好漢たちの思いをこめた「減字木蘭花」を歌ってみせ、驚く徽宗に向かって自分の身分を明かし、招安の許しをもらえよう懇願するのだった。

これらのエピソードが類似性を持っていることは一見して分かる。李師師のもとに徽宗の他にも出入りをしている男がいた、というのは全ての作者にとつて共通の認識であり、また、その男も名妓李師師にふさわしいだけの藝才を持っているだろう、ということも想定されているようである。

その意味において、『貴耳集』の周邦彦、『宣和遺事』の賈突、『水滸傳』の燕青は並列におかれていると言えるし、名前のみで登場しているとはいえず、この當事者の中に李邦彦も數に入るだろう。また、『貴耳集』では李邦彦が、『宣和遺事』では高俅が、それぞれ李師師と徽宗を引き合わせている。つ

まり、李邦彦は當事者としては燕青と關係を持ち、媒人役としては高俅と關係を持っているわけである。しかも、この三つの話に、共通の登場人物が徽宗と李師師しかない、というのはかえって興味深い。中心になる人物が、そのことによつてはっきりと指し示されているからである。

この浪子の一群の關係が徽宗と李師師を中心にし、その周圍で展開されている、という構圖は、燕青と高俅二人の關係も補強するものとなり得るであろう。

さらに、「浪子」、という言葉の内容に對して、李邦彦という人物が残した影響については考えておかねばなるまい。「高官」で、かつ「浪子」であるという本文中での高俅に起きている「逆轉」は、史上においてすでに李邦彦によつてなされていたことであつた。そして少なくともこの一個人の中で、浪子、という名と各種の藝能は既に結びついていた、ということである。

『揮塵錄』に見る限り、高俅は蹴鞠の能力はあつても、いわゆる「浪子」ならず者、という一般的な意味からは遠かつた。ところが、徽宗皇帝の周りにいた人物であつたことから、李邦彦に想像が及び、改めて「浪子」の世界と結び付けられなおすことになつたのではないか。

『水滸傳』本文中の高俵は、博徒ら江湖人との付き合いもし、武藝、藝能の能力も持ち、権門の貴公子と遊び、やがて權勢を振るえるところまで出世する。そして、性格的には忠孝を知らない、というのであるから、およそ、「浪子」という言葉のもつ限りの典型的な意味を體現している、ということができさる。

そして、高俵がその出自から既に梁山泊の好漢たちと同じような世界と關係を持つていた、ということ、なおさら彼の忠孝の無さ、というのが強調されるのである。それは燕青の存在でより明確に焦點が當てられることになっている。さきに逆轉、とした高官と浪子という二つの立場の兩立が李邦彦によつて既に成されていたことであれば、それは單純な「逆轉」ではなかつた。

同じような能力を持ち、同じような世界に育つた二人の浪子が、忠孝と縁のない一方が大出世を果し、忠孝に篤い一方が強人に身を落とし、國家に齒向かう賊軍とされる、という「矛盾」を示しているものだったのである。

燕青と高俵が、本文中において、その履歴や能力の類似點から單純に比較し得るだけでなく、同種の人物類型であるところを踏まえた上で、差別化されているということ、ここ

らも推測することができよう。

以上、『水滸傳』本文での比較、「浪子」という言葉とそれ關係する、小説の登場人物による比較、徽宗と李師師、また李邦彦をはさんだ形での比較、とさまざまな方法によつて燕青と高俵の關係を考へてきた。そして、それらを通して、この二人の人物が比較に耐えうること、またその關係がただ二人の間にとどまるものではないこと、が證明された。

徽宗皇帝代、つまり「浪子」という歴史における人物像が特別の意味を持ち得た時代について書かれた小説である『水滸傳』において、「浪子」という小説における人物像が登場することはごく自然なことであり、燕青と高俵という二人の「浪子」が登場し、その二人が『水滸傳』において重要な役割を果すことも、また當然だつたと言える。

補 二人の浪子と『水滸傳』

キャラクターの分類として同じ立場に立ち、徽宗と李師師の關係について描いたエピソードと關係する、という意味でもつながっている燕青と高俵であるが、この二人の關係はさらには小説の構成全體に及ぶものと考えられる。

第二回の高俣出世物語から實質的に物語が始まり、燕青が九十九回で好漢集團を脱退する、という構成は、成書の段階でかなり意識的にとられたものではないか。

梁山泊の命運を決することになる招安の取りつけへの、燕青の深いかかわり。また、その作業の途中で持ち出される、燕青と高俣による相撲の勝負(第八十一回)。これに先んじて燕青が泰山で奉納相撲に参加する(第七十四回)のは、むしろこのためかとも思われる。

二人の浪子の關わりによって、物語が始まり、方向轉換され、決着するという構圖は、『水滸傳』を梁山泊集團の集結からそれによる戦闘、やがて解體に至る戦記小説としての構造に終始することから救っているのではないだろうか。

おわりに 浪子のトライアングル

當稿では、あくまで燕青と高俣の關係性に絞って論を進めることにした。そのため、こぼれおちたものもままある。水滸傳に登場する「浪子」つまりここでは「浮浪子弟」に限定される、はただ今回取り上げたものばかりではない。そして、最後に少しばかり觸れることができたように、「浪子」という言葉は、この『水滸傳』という小説が現今の形に至り、完成

されるにおいて重要な意味を果していることは疑いようもない。

背景として、「浪子」徽宗皇帝の時代を持ち、その時代の歴史人物として「浪子」宰相李邦彦がおり、そこからイメージを引き継ぎ、半架空の人物として最大の悪役「浪子」大尉高俣が存在し、さらに架空の人物として主人公の側に正義の「浪子」燕青が登場する。

皇帝を中心にして三人の人物が三つのレヴェルで取り圍む「浪子のトライアングル」の中に、『水滸傳』全體が構築されているという構圖の想定とその證明に向けての作業は、今後さしあたってのもっとも大きな課題になった。

注

- (1) 『水滸傳』宮崎市定1972を始めとする。
- (2) 『水滸』における「對立」の構圖「笠井直美1993東洋文化研究所紀要に詳しい。
- (3) ここで使った「キヤクター」という語にも、いわゆる「キヤクター批判」における、テクストの空隙を埋める意圖はない。
- (4) 叢書集成初編。
- (5) 『新刊大宋宣和遺事』中國古典出版社。
- (6) 古本戲曲叢刊四集(脈望館抄本影印本)。

- (7) 同右。
- (8) 中華書局排印本。
- (9) 四庫全書提要。
- (10) 同右。
- (11) 古本小説集成收録。
- (12) 世界書局(明葉敬池刻本影印本)二十回本。
- (13) 宮崎1972には、徽宗が「浪子」と呼ばれたと史料にある
 としているが、いずれの史料にあたったか、未見。
- (14) 四庫全書提要。